# 【習作】赤い奔流――Ｇｅｒｏｉｎｉ ｎａｓｈｅｇｏ ｖｒｅｍｅｎｉ

黒田手稲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【習作】赤い奔流――Героини нашего времени

【Ｎコード】
Ｎ６０１２Ｚ

【作者名】
黒田手稲

【あらすじ】
時は、ガイウス歴１９１４年、夏。エウロペア大陸は、動乱の季節を迎えた。極北の帝国ラッスィーヤでも、人々が圧政に喘ぐ中、開戦に向けた準備が進められていた。砲火が血の華を咲かせる前線から、革命の烽火が立ち昇る。幼くして少女時代を奪われたアナスタシアとアレクサンドラの義姉妹も、この抗い難い奔流に巻き込まれていく。

## プロローグ（前書き）

読者様へのお願い。
カルロ・ゼン様の『幼女戦記』に触発されて、戦記物に挑戦しました。

具体的な設定等で類似点はないと思うのですが、『幼女戦記』の剽窃にあたる恐れがあるとの印象を持たれましたら、作者にご一報願います。

# プロローグ

「革命に究極的な勝利をおさめた者と比較するなら、敗者の方が歴史の審判に照らして幸運だったかもしれない。とくに革命の成果から疎外された者は、歴史の邪視がつかさどった悲劇の被害者であり、後世の人びとの共感と同情を誘うことも珍しくないからである。

かれらの思想が敗北し、その理念が挫折したのはたしかな事実である。しかし没落した英雄には、しばしば美化されたロマンがつきまとう。時には敗者の志が単純に理想化されるあまり、後世に熱狂的な信者を獲得することもある。

……勿論、歴史家の仕事は敗者の言い分だけに単純な感情を移入したり、それを誇大に美化することではない。しかし、『暗い時代の人々』の著者ハンナ・アレントのいう「公的領域の光が奪われた暗い時代」に生きながら、かすかな光芒を放った人物の忘れられた足跡をたどり、その思想を再現するのも歴史家の義務ではなかろうか」

山内昌之『スルタンガリエフの夢』

「将来戦においても正面攻撃は避けがたく、防御の頑強性からも、突破は著しい兵力上の優勢を保ち、如何なる敵の抵抗をも撃ち破り得る攻撃の配備をする必要がある……。主攻撃正面にして三から六倍、非重点正面でも二倍を確保しなければならない」

V．K．トリアンダフィーロフ

「現代戦に於ける資材の進歩は、敵戦闘部署の全縦深に亙り同時に之を破摧することを可能ならしむるに至れり、迅速なる兵力移動、奇襲的迂回及び退路遮断に依る急速なる後方地域の占領は、愈々其の可能性を増大せり。敵を攻撃するに当りては、完全に之を捕捉殲滅せざるべからず。

……現代戦は畢竟其の大部分火力闘争に外ならず」

『１９３６年赤軍野外臨時教令』

# プロローグ

「皇家の盾に暗雲が立ちこめている。皇后よ、赤い盾に注意召されよ」

――ラスプーチンの予言

あの日のことは、今でもはっきりと覚えている。

ナースチャと一緒に、私は部屋で人形遊びをしていた。ちょうど、極東の島国から、ゲイシャという美しい女の人を模した人形が届いたので、私たちは張り切って遊んでいたのだった。

ラッスィーヤの冬は厳しい。午後３時を過ぎたばかりだというのに、辺りは既に薄暗く、外は氷点下１０度を下回っていた。

だが、パレオローグ家の子ども部屋は、薄着でちょうどよいくらいに暖められていた。

人形遊びに熱中していた私たちは、最初、母が部屋に入ってきたのに気付かなかった。

いつの間にか私たちの隣に立っていた母は、私たちに向かって、「貴女のお兄さんが死んだの」、と切り出した。当然と言うべきか、まだ幼かった私は、死が何なのか、理解できていなかった。

私は、「もうお兄ちゃんと遊べないの？」と無邪気に問い返した。

母は、蒼ざめた幽鬼のような表情で、不思議なほど優しく、「そうよ、サーシャ」と応じた。

ナースチャが息を呑む音が、聞こえた。

私はといえば、あの優しくて物識りだったイーリャと、もう遊べないというのが、寂しくもあり、残念でもあった。言い換えれば、それだけであった。

幼さとは、時に残酷である。

「お兄ちゃんは何で死んじゃったの？」、と問いかけた私に対する母の返事は、素っ気無く、不気味なほどに一切の感情を感じさせないものであった。

「殺されたのよ。あのニコライに」

思えば、あの時、既に母は復讐を決意していたのだろう。

ナースチャが、私の義姉になるはずだったアナスタシア・ニコラエヴナ・トハチェフスカヤが、陸軍幼年学校に入ったと知ったのは、それから3年後のことであった。

私は、皇帝ニコライに対する母の呪詛を子守唄に、病気一つすることなく、すくすくと育っていった。

兄イリヤが、行幸中の皇帝ニコライを暗殺しようと斬りかかって、返り討ちに遭ったのだと知ったのは、私が初潮を迎えたころだった。兄に致命傷を負わせたのが、父だったと知ったのも、そのときだった。父も、兄との戦闘の傷がもとで、事件翌日に亡くなっていた。

だが、母が父の死を弔ったことはなかったし、私も父がいないことに何の違和感も覚えていなかった。もっと正確に言えば、自分に父がいたと知ったのは、父の死を知らされたときであった。

何故イリヤがツァーリ暗殺を企てたか、その理由を知ったのは、そのずっとずっと後のことであった。

# 第一話

「納得できませんっ！」

甲高くも透き通った声が、煉瓦造りの建物に木魂した。
ここは、帝都ペトログラードにある近衛セミョーノフ連隊の本部。
時は夏。
極北の帝国ラッスィーヤであっても、夏は３０度越えの日もそれほど珍しくはない。
例え暑くとも、不快な臭気を伴う外気を取り込みたくないという思惑からか。はたまた、軍組織として、機密漏洩は好ましくないとの判断からか。その部屋の窓は締め切られていた。
だが、そんなことに関わりなく、その怒声は辺りに響き渡ったのである。
声の持ち主の怒りのほどを、窺わせるものであった。

実際、アナスタシア・ミハイロヴナ・トハチェフスカヤは、激怒していた。
先月１６歳になったばかりのアナスタシアだが、彼女のことを「子ども」と形容する者はいないだろう。
腰まで垂れたプラチナブロンドの髪は、夏の陽光を受けて、いや増しに光り輝いている。目鼻立ちはすっきりしており、整いすぎるほどに整った造形は、見る者に冷たい印象を与える。その印象を強めるのが、極北の海を思わせる濡れたエメラルドの瞳である。
微笑み一つ浮かべないこともあって、彼女の眼光は極北の吹雪さながら。
幾多の貴族のプレイボーイたちの告白を、その一瞥で黙らせてきたのは、伊達ではない。
正真正銘の貴族の姫君であるはずなのだが、夢見がちな姫という

よりは、氷の女王。

そんなアナスタシアの怒声を浴びながらも、ミハイル・イヴァノヴィッチ・トハチェフスキー近衛大佐は、何とかアナスタシアを宥めようと苦慮していた。

４０代半ばのミハイルは、名前からも推察されるように、アナスタシアの実父にして、彼女の上官でもあった。

彼は、古くからの名門の出ながらも、没落しつつあったトハチェフスキー家の当主として、近衛セミョーノフ騎兵連隊長の地位にあった。

親子で同一の部隊にいるなど、公私混同である。

だが、腐敗したラッスィーヤ帝国にあっては、有り触れたことであり、そうした特権を利用しない貴族など存在しないと言っても良かった。

アナスタシアも、何としても軍部において出世したいとの思いから、コネを利用することに躊躇しなかった。

「そうは言うがな、ナースチャ」

ミハイルは切り返した。

「これは、お前にとっても、アレクサンドラにとっても、最良の決定だろう」

父の言葉を聞くや、アナスタシアの整った眉が跳ね上がった。

「どこがですっ！私のサーシェンカは、まだ１２歳になったばかりではないですか。それなのに、無理矢理、戦地に立たせようとするとはっ！軍首脳には、恥ずかしいという感情はないのですか」

いつアレクサンドラがお前のものになったのだ、と問いたいミハイルであったが、その点については、賢明にも沈黙を守った。

「考えてもみよ。あの事件以来、パレオローグ家を警戒し、忌避す

る者たちは多い。特に、皇后陛下はラスプーチンの妄言を信じておられる。宮廷の一部には、今でもパレオローグ家を取り潰すべきだとの声があるのだぞ」
「皇后陛下は、もはやラスプーチンの操り人形ではないですか。そんな妄言に一々付き合うほうがどうかしています」
さすがに、大声で皇后を批判しないだけの分別は持ち合わせているのか。
アレクサンドラは、声を小さくした。それでも、内容自体は十分に不敬であったが。
「いい加減にしないか、ナースチャ！」
こんな会話が外に漏れたら一大事。そう考えたのか、ミハイルはアレクサンドラを止めようとする。
「皇后陛下のみならず、皇帝陛下も、パレオローグ家のことを大変危険視しておいでだという話だ。そのことを察知した心ある知人たちが、アレクサンドラの命をも救うべく、努力したのだ。そして、なんとかアレクサンドラをカイザーライヒとの戦闘に従事させることで、皇族方の同意を取り付けたのだ」
それは、言ってしまえば、苦肉の策。
エスターライヒの皇太子暗殺を機に始まった今回の戦争を隠れ蓑にして、何とかパレオローグ家を存続させようとする試みであった。
パレオローグ家は、ラッスィーヤの名門貴族と広範な縁戚関係を結んでいて、知己も多い。特に、例の一件までは、軍部において隠然たる影響力を持っていた。その親パレオローグ派とでも言うべき軍や政府の高官がツァーリに働きかけたのである。
１２歳の少女をカイザーライヒとの戦争の第一線に投入するという代案を以って。

当然のことながら、アレクサンドラの姉を自認するアナスタシアに、この決定が受け入れられるはずもない。
かくして、アナスタシアへの兵役命令を知ったアナスタシアは、

父でもあり上官でもあるミハイルに詰め寄ったのである。
アナスタシアとて、首都にあって暗殺の危険に晒されるよりは、前線のほうがまだマシだという論理を頭から拒絶しているわけではない。
だが、それでも、義妹のこととなると分別を失いがちになるアナスタシアであった。

「良いか、ナースチャ。アレクサンドラは無防備に前線に出されるというわけではない。多くの者たちの協力の甲斐あって、我らの連隊が彼女の護衛に就くことになったのだ。これだけでも、満足すべきではないか」
ミハイルは、そうアナスタシアを説得する。

実際、これは望み得る限り、最良の条件である。
今回の戦争の帰趨がどうなるかは、判然としない。
だが、いずれにせよ、戦況が苦しくなれば、あの『剣』のパレオローグ家の次期当主として、アレクサンドラは戦場に立たされることになるのだ。
アレクサンドラの年齢など、不利な戦況を前にしては、一顧だにされないだろう。
どうせ徴兵される可能性があるなら、自分たちの保護下におかれるほうが、アレクサンドラのためではないか。ミハイルは、そう考えたのである。

全く理解できないわけではないが、納得もできない。そういう表情をしたアナスタシアが、なおも言い募ろうとしたとき。
控え目ながら、ノックの音が隊長室に響いた。

さすがに、人前では、先ほどまでのような態度をミハイルに対してとるわけにはいかない。

そう考えたアナスタシアは、姿勢を正して、上官であるミハイルから距離をとった。
もっとも。
我を忘れるほど怒っていても、彼女の立ち居振る舞いには、一分の隙もなかったのであるが。

「はいれ」
ミハイルは、ノックをした訪問者に、そう応じる。
「失礼いたします！」
そう言いながら、ドアを開けたのは、ミハイルの副官を務める老クラーキン大尉であった。
「パレオローグ大尉をお連れいたしました」
そう言うや、クラーキン大尉は脇に退き、訪問者に道を譲った。

――パレオローグ大尉とは、よもや……。
そう思い、ミハイルのほうを見やるアナスタシア。
ミハイルが、ニヤリと口元に笑みを浮かべるのが見えた。

さっと入り口のほうに視線を戻すと、近衛将校の軍服を身に纏った少女が、きびきびとした所作でミハイルの正面に向かって歩を進めてきた。

アナスタシアは、我知らず、息を呑む。

あれから、６年。
見違えるほどに大きくなった。
まだ１２歳になったばかりなのに、奇妙なほどに大人びた貌をするようになった。
ただ歩いているだけなのに、ただそれだけの所作がどうしようもなく美しいと思う。

そこにいたのは、一緒に人形遊びをした、可愛らしいサーシェンカではなかった。
アナスタシアが成長したように。否、成長せざるをえなかったように、アレクサンドラも成長したのであろう。

シベリアの永久凍土よりもなお白く、銀色に輝く髪は、三つ編みにまとめられ。ティアラのように、頭に巻かれている。
ラッスィーヤの伝統的な髪型ながら、アレクサンドラがするだけで、まるで銀の王冠だ。

かつては、ふっくらとして林檎のようだった頬は引き締まり、目鼻立ちもはっきりとしている。
そして、何よりも特徴的なのは、「パレオロゴスの緋眼」と謳われる、鮮やかなまでの赤い瞳。パレオローグ家の祖、ソフィア・パレオローグ以来のパレオローグ家の象徴だ。
強い意志を感じさせるアレクサンドラに、峻烈な赤は、どうしようもないほど似合っていた。

――変わったわね、私のサーシェンカ。
万感の思いを込めて、アナスタシアは、誰にも聞こえないくらい小さな声で、そう呟いた。

ミハイルの作業机の前に歩みよったアレクサンドラは、教科書どおりの敬礼をする。
「申告します」
そう告げる声は、年不相応なまでに、凛としたものであった。
「アレクサンドラ・ペトロヴナ・パレオローグ近衛大尉、本日付で近衛セミョーノフ連隊に転属することになりました」

ミハイルは、椅子から立ち上がって、これに応じた。
「近衛セミョーノフ連隊長のミハイル・トハチェフスキーだ。連隊を代表して、貴官の着任を歓迎する」

型どおりの挨拶が済むと、ミハイルは再び椅子に腰を降ろした。
「元気そうだな、サーシャ。ちょうど一月ぶりといったところか」
にこやかな笑みを浮かべながら、親しげに切り出すミハイル。

アレクサンドラも、表情を少し崩して、これに応じた。
「はい、ミハイルおじ様。あのときは、突然いらっしゃったので、びっくりいたしました」

この会話に納得いかないのが、アナスタシアである。
自分でさえ、あの一件以来、6年も会っていなかったというのに。
今の会話から察するに、父とアレクサンドラは、最近会っているのである。しかも、彼女に、そのことについて、一言も伝えずに。
迂闊にサーシェンカと接触しては、彼女を監視している内務省を警戒させることになるかもしれない。そうなっては、自分は勿論のこと、サーシェンカやパレオローグ家にも迷惑がかかるかもしれない。
そう思って、簡単な手紙のやりとりしかできなかったアナスタシアである。

「一ヶ月前にサーシェンカとお会いになったとは、聞いておりませんわ。お父様。どういうことです？」
アレクサンドラがいるにもかかわらず、アナスタシアの口調が、やや詰問調になるのも、無理からぬことであった。

相変わらず、アレクサンドラの事となると、見境がなくなる。

ミハイルが、そう言いたげに嘆息しても、アナスタシアの態度には、いかなる動揺も見られなかった。
再度、溜息をついた後、ミハイルは、呆れたように応じた。
「知ってのとおり、既に一月前には、カイザーライヒとの開戦の可能性は極めて現実的なものとなっておった。私や軍高官が帝都におる間は、皇后も暴挙に出る可能性は低かった。だが、戦争が始まった場合どうなるか、はっきりしなかった。実際、カイザーライヒに内通する者が出るかもしれない、などという噂が流れておるからな。ひどい流言になると、裏切りの可能性のある者は、今のうちに裏切れぬよう措置を講ずるべきだ、などというとんでもない内容のものでな。恐らくは、ラスプーチン一派あたりか、極右議員あたりが流したものであろうが」
「それで、私のことを心配されたおじ様が、立寄ってくださったのですわ。ナースチャお姉さま」
ミハイルの言葉を、アレクサンドラが継いだ。
「……そういうことだったのね」
経緯は把握した。
内容に関しては、全く以って納得できないが。
「でも、サーシェンカ。貴女、本当にいいの？ラスプーチンが何か仕掛けてくる恐れはあるけれど、何も前線に来る必要はないでしょう？帝都から遠く離れたダーチャに避難するという手もあるわ」
軍の高官たちがアレクサンドラに肩入れするのは、結局のところ、パレオローグの『剣』で戦況を自軍有利にしたいがため。ラスプーチンの手に落ちるのは論外だが、だからといって、軍部の言いなりになる必要もないではないか。
自身、その軍人貴族の家系に生まれながら、アナスタシアはそう

思う。

「ありがとう、お姉様。私のために、考えてくれて。でも、大丈夫よ」

アレクサンドラは、アナスタシアにそう答える。

「私は、『剣』のパレオローグ。お父様とお兄様が亡くなられた以上、直系は私しかいないわ。いずれは、パレオローグの当主として、戦場に立たざるをえないわ。そう考えれば、今回のことは、ちょうど良い機会なのかもしれないわ。……私たちの目的のためにも……」

アレクサンドラに、そう言い切られてしまっては、アナスタシアとしても、これ以上反対できない。

アレクサンドラが沈黙するのを見計らって、ミハイルが口を開いた。

「今後の予定だが。１０日後に連隊の動員が完了する予定だ。その後は、全軍の動員完了を待たずに、先行して攻勢に出たサムソーノフ将軍隷下の北西方面第２軍に編入されることになる。ナースチャには、中隊をしっかり監督しておいて欲しい」

アナスタシアは、１６歳にして陸軍士官学校を卒業した正規の将校である。ミハイルの連隊に着任した際に、一個中隊の指揮を任されていた。

「それで、サーシャの処遇だが……」

パレオローグは扱いが特殊だからな、と呟きながら、ミハイルは、一呼吸入れた。

「一応、連隊本部付という形になるが、前線では、私の連隊が完全

に護衛に回ることになる。戦闘になるまでは、英気を養っていてくれ。何か用があったら、私かナースチャに遠慮なく言うといい」

「了解いたしました、おじ様」

「さて、二人で積もる話もあるだろう。二人とも、今日はもう休んでいい」

公私混同も甚だしいが、ミハイルは、少女二人に、あっさりとそう告げた。

「お心遣い感謝いたしますわ、お父様」

久しぶりに、血の繋がらない最愛の妹と心おきなく話し合う時間を得たアナスタシアは、即座にミハイルに礼を言った。

「サーシェンカ、行きましょう」

「はい、お姉様」

アレクサンドラも、ミハイルに一礼すると、アナスタシアに続いてドアに向かって歩きはじめた。

「今日は他に用もないのでしょう？」

「はい」

「なら、今晩は家に泊まっていくといいわ。きっとお母様もお喜びになるはずよ」

そう言うや、アレクサンドラの返答を待たずに、アナスタシアは、隊長室の前で机に向かっていたクラーキン大尉に、馬車を呼ぶように伝えた。

自分より階級が上の者に雑用を頼むなど、本来ならば有り得ないことである。だが、クラーキン大尉は、平民出の士官だった。そし

て、ラッスィーヤ帝国にあっては、それだけで使い走りの理由として十分であった。

「かしこまりました」

クラーキンにとっても、馬車の手配など、手慣れたものである。

むしろ、クラーキンをほんの少しだけ驚かせたのは、アナスタシアが浮かべていた嬉しげな笑みであったかもしれない。

何せ、一度たりとて、彼女が笑みを浮かべているところを見たことがなかったのだ。

もっと、ああいう表情をすればいいのに。そう思う老クラーキン大尉であった。

# 第二話

カイザーライヒ陸軍第８軍参謀を拝命したアンネローゼ・ホフマン中佐は、失意の溜息を漏らしていた。

大陸最強の名を恣にしているカイザーライヒ陸軍。
その頭脳とも言える参謀本部を3年前まで率いていたのが、フォン・シュリーフェン前参謀総長であった。
アンネローゼは、そのシュリーフェンの秘蔵っ子として可愛がられ、貴族出身ではないのに、参謀本部で出世街道を突っ走ってきた。

アンネローゼの現在の階級は中佐。
わずか２５歳にして、である。
戦時ならば兎も角、平時における昇進である。
まさに、前代未聞の大出世としか形容できない。

もちろん、いかにシュリーフェンの後押しがあったとはいえ、それはアンネローゼ自身の才なくしては考えられないことであった。
穴だらけであったシュリーフェンの戦争計画を、魔導砲部隊、魔動車化部隊、新型魔導飛空艦の有機的連携によって、補強。
特定条件下では、成功の可能性が見込めるまでに仕上げたその才幹を高く評価されたのであった。

最も、その特定の条件というのが、最大の曲者であったのであるが。

すなわち、神速で前進するであろう前線部隊の兵站を維持できるだけの魔動貨車の確保、である。

実のところ、アンネローゼとしては、全体戦略の変更を求めるための婉曲的手段として、この条件を強調したつもりであった。
しかし、ガリア共和国に対する勝利の可能性を血眼になって求めていた参謀本部高官は、根拠なき楽観論によって、都合よくこの条件を忘れたのであった。

アンネローゼの受難は、まだ続く。

3年前にシュリーフェンが退役、病死すると、参謀総長に就任したのが、フォン・モルトケ参謀総長であった。

そのモルトケ参謀総長が、着任早々に着手したのが、戦争計画の変更であった。
それ自体は決して悪いことではない。

だが、引継ぎの過程で、致命的な問題が発生していた。
アンネローゼがつけた条件は、言及すらされなかったのである。
さらに、本来の戦争計画が持ち合わせていた冒険主義的な要素が失われてしまった。

本来の戦争計画は、対ガリア共和国戦線の右翼に圧倒的な兵力を集結させて、反時計回りに機動戦を展開し、ガリア軍主力を受け止めている左翼と連携して、ガリア軍主力を挟撃・包囲するというものであった。

問題は、補給もさることながら、左翼が非常に薄くなるということ。
かといって、右翼から兵力を引き抜いてしまっては、右翼の打撃力が失われてしまう。

シュリーフェンは、あえて危険を冒しても、右翼に兵力を集中させることを決定していた。
しかし、慎重なモルトケは、右翼から兵力を引き抜いて左翼を強化することにしたのである。
これは、後にカイザーライヒの戦略構想全体を破綻させる、一つの遠因となるのである。
これに抗議したアンネローゼは、モルトケから疎まれて、参謀本部作戦部から摘み出されてしまう。
そして、開戦と同時に、急造された東部戦線を担当する第８軍の作戦参謀として転属されることになったのである。

だが、その第８軍の司令官が問題であった。
マクシミリアン・フォン・プリットヴィッツ伯爵。
彼が直面した問題は、開戦直後に西進を開始したラッスィーヤ帝国第１軍と第２軍をどう食い止めるか、であった。
ラッスィーヤ軍は第１軍と第２軍をあわせて、４５万。
これに対して、カイザーライヒ軍は、主力を対ガリア共和国戦線に投入したため、わずかに１５万。
彼我戦力比は実に３倍に及んでいた。
この現実を前に、慎重すぎるとの評判を持つプリットヴィッツがとる作戦がどういう内容になるか。火を見るよりも明らかであった。
「誠に遺憾ながら、遅滞防御を試みながら、オストプロイセンより後退するしかあるまい」

作戦会議の場を、失望と溜息が覆う。
やはり、そうなるか。呟きが聞こえてくる。

もちろん、例え3倍の戦力差があろうとも、やり方次第ではラッスィーヤ軍を食い止められると考える指揮官もいた。

その彼らが、プリットヴィッツを説得しようと口を開く直前。

「閣下。失礼ながら、後退の必要はないと存じます」

凛とした声色で、そう発言するのは、言わずと知れたアンネローゼ・ホフマン中佐。
女性としては珍しく、肩のあたりで切り揃えられた赤茶色の髪が、かすかに揺れている。
シュリーフェンが贈ったというモノクルが、彼女のブラウンの瞳にやどる知性の光と見事に調和している。
女性経験が豊富な貴族将校からすれば、際立った美人というわけではないが、生気に溢れた貌で、冷たいほどに理知的でありながら、どこか暖かみを感じさせる雰囲気を纏っている。
初老を迎えた将官たちからは、孫娘のごとく可愛がられている、というのも頷ける。

「どういうことかね、ホフマン中佐」
眉をしかめながら、プリットヴィッツはアンネローゼに発言を促す。

「我が軍が劣勢ではないからです、閣下」
「良いか、ホフマン中佐。我が軍は総勢１５万。これに対する敵軍は総勢４５万と見積もられておる。いかに、ラッスィーヤ軍が低能

であろうと、この戦力差を覆すのは困難であろう。……誠に遺憾ながら、遅滞防御を試みながら、ガリア戦線を制した主力を待つのが最善であろう」

聞き分けの悪い子どもを相手にするように、会議参加者が皆、認識していることを、殊更に繰り返すプリットヴィッツ。

「いいえ、閣下」

そのプリットヴィッツの発言を一顧だにすることなく、アンネローゼは切り返す。

「我が軍は、敵軍に対して圧倒的優勢にあると存じます」

そう言い切った。

呆気にとられたような雰囲気が、会議室を支配する。

理解できない、とばかりに首を振るプリットヴィッツ。

「ラッスィーヤ軍総勢４５万とは申せ、第１軍と第２軍は全く連携がとれておりません。さらに、両軍を湖沼地帯が隔てており、相互に支援しにくい体勢にあります。そもそも、この地域は、主要幹線も未整備であるため、大軍の迅速な移動に向きません」

一戦もせずに退くなど武人としてあるまじき事、と考える好戦的将校は、我が意を得たり、とばかりに、頷く。

それに対して、慎重な将校からは、楽観的すぎる、との呟きが聞こえる。

「さらに、ラッスィーヤ軍兵士は戦意に乏しく、装備も貧弱です。特に、魔導重砲については、我が軍と比べ、射程、砲数ともに圧倒的に劣ります」

「したがって」、とアンネローゼは声を大きくする。
「一個師団を以って、敵第1軍を湖沼地帯に釘付けにする一方で、第二軍の南東方向より主力で側面突破、背面展開を図れば、第2軍を両翼より包囲殲滅しうると考えます」

「机上の空論だ」
「良くぞ言った。ラッスィーヤの熊など、どれほど集まろうと大したことはないわ」
「ラッスィーヤの物量を相手に包囲だと……。こちらが逆包囲されるに決まっているだろう」

賛否両論が交じり合い、会議室が俄かに騒然となる。

もともと、エウロペア諸国には、ラッスィーヤを未開の遅れた神秘主義国家と見なす向きが強い。
実際、勤勉実直を旨とするカイザーライヒ軍人からすれば、国民の8割が農民で、識字率3割弱などというラッスィーヤを、文明国などと見なせるはずもないのである。
数の差など、何するものぞ、という空気が、好戦的な将官を中心に広がっていた。

これに対して、当然、異論もある。
プリットヴィッツ伯や彼の幕僚たちからすれば、野蛮であろうが何であろうが、戦闘とは結局のところ数なのであり。当該戦域に、より多くの兵力を結集させた側が勝つものなのである。
その理屈からすれば、カイザーライヒには勝機がない。
喧喧諤諤たる議論の末、下された決定は、およそ拙劣なものであっ

た。
「第1師団が、敵第2軍に側面から攻勢をかけ、その感触をもとに、後退の可否を改めて決定する」
それでは戦機を逃す、と詰め寄るアンネローゼに対して。
プリットヴィッツ伯は、指揮権は自分にある、と遮って、会議を打ち切ったのであった。

我が策成らず、と慨嘆したアンネローゼであったが。
神は、彼女を見放しはしなかった。

弱気なプリットヴィッツ伯にモルトケ参謀総長が激怒。
これを更迭して、代わりに第8軍司令官にウドの老木こと、ヒンデンブルク退役元帥を抜擢し。 更に、実質的な司令官として、陸軍きっての俊英との令名高いルーデンドルフを充てたのである。

後に、「現代のカンネー」と呼ばれることになる、タンネンベルクの戦いの主要登場人物は、かくして出揃った。

それは、アナスタシアとアレクサンドラにとって、血と泥に塗れた大退却の始まりを意味していた。

# 第三話

「お姉様。どうして、こんなにも第1軍と距離が開いてしまっているのですか。……これでは、カイザーライヒ軍に各個撃破の好機を与えることになるのではないですか」

8月も下旬にさしかかると、エウロペアは秋の始まりを迎える。つい10日ほど前までは30度を越えていた日中の気温も、25度を下回るほど。

雨が多くなり、夜は少し肌寒くなるくらいの日が続く。

ここは、カイザーライヒの東部国境地帯。

第2軍主力の宿営地である。

軍用魔導列車で、ラッスィーヤ西部を横断したアレクサンドラたち近衛セミョーノフ連隊は、国境を越えて前進中の第2軍に無事合流したのであった。

とはいえ、第2軍は、彼女たちにとって、快適とは言いがたかった。

まず、第2軍司令官のサムソーノフ将軍に問題がある。

具体的には、申告の際の視線が、恐ろしく粘着質。

アナスタシアとて、自分に向けられる、その手の視線には慣れていたし、相手にすらしてこなかった。

だが。

サムソーノフ将軍は、どうやらアナスタシア以上に、アレクサン

ドラに興味がある模様。
ナメクジのようなねっとりとした視線がアレクサンドラに向けられたことに気付いたとき。
サムソーノフ将軍閣下の眼を醒ましてさしあげよう。
真冬のシベリアのような温和さで、そう即断アナスタシアは、氷壊弾を放とうとした。
しかし、よろめく振りをして、射線を遮ったミハイルのために、彼女は貴重な機会を失ったのであった。
「常に帝国の盾として戦場に在ったという、パレオーログの『剣』に期待する」
爛れた臭いとともに吐き出された、その常套句に、思わず顔をしかめそうになる。
だが、アナスタシアは、持ち前の自制心を総動員して、形ばかりは完璧な答礼を返すことに成功する。
そして、彼女は、そのまま、ミハイルとアレクサンドラとともに退出した。
その後、連隊に割り当てられた民家に移動したミハイルとアレクサンドラは、地図を広げながら自軍の戦況を再確認しはじめた。
声に出さずに、サムソーノフに対する呪詛をはき続けるアナスタシアを尻目に。
そして、冒頭のアレクサンドラの質問に戻る、というわけである。

アレクサンドラの問いかけを受けて、我に返ったアナスタシアは、軍内部の実態について説明を始めた。

「第１軍司令官のレンネンカンプ将軍と、サムソーノフ将軍は、水と油のように仲が悪いという専らの噂なのよ。信じられないような話だけれども、極東の奉天駅で大喧嘩して、殴り合いにまでなったらしいわ」

「軍の高級将校同士が、駅で殴り合いですか……？」

「ええ。それ以来、お互いに顔も合わせないようになったそうよ。今回の西進にあたっても、司令官同士の連絡はほとんどないらしいわ。ひどい話になると、レンネンカンプ将軍は、サムソーノフ将軍を支援したくないがために、北進してケーニヒスベルクを攻囲しようとしているとか……」

信じられなかったのであろう。

アレクサンドラは、真紅の瞳が零れ落ちそうなくらい目を見開いて、絶句している。

年不相応なまでに大人びていると思ったけれど、こういう表情をしていると、まだまだ子どもね。

まだまだ、サーシェンカのことは私がしっかりと面倒を見ないとダメね。

そう、安堵と保護欲の入り混じった感想を抱く。

「だから、北西方面軍の総勢が４５万といっても、２５万の第２軍と２０万の第１軍に分断されていると言っても過言じゃないと思うわ。これでも、カイザーライヒ軍１５万に対して数的優位を保持していると言えるけれど……」

「カイザーライヒ軍は、我が軍に比して、装備・士気ではるかに優越しておるからな。油断すると危ういかもしれん」
ミハイルが、アナスタシアの言葉を継いで、自らの懸念を表明した。

それでも、いくら司令官同士の仲が悪くとも、いざとなれば私情を捨てて、連携するだろう。そう思っていたアナスタシアたちであったが、その根拠のない楽観論は、最悪の形で裏切られることになる。

これまで、抵抗らしい抵抗を受けずに西進していたサムソーノフ率いる第2軍であったが、アナスタシアたち近衛セミョーノフ連隊合流から3日後、正面前方より、カイザーライヒ軍の砲撃を受ける。
カイザーライヒ軍ご自慢の、重曲射魔道砲が、大きな弧を描き、前進中の第2軍を強打した。

本来ならば、直ちに自軍の砲兵部隊が反撃に移るべきところである。
だが、練度の低いラッスィーヤ軍砲兵部隊は、移動中だったこともあり、砲撃開始に手間取った。

ただでさえ、射程、命中率、威力のすべてにおいて、ラッスィーヤ軍の魔道砲は、カイザーライヒのそれに劣る。
その上、練度、士気で負けているとあっては、砲撃戦で勝ち目は薄い。

カイザーライヒ軍の主力と遭遇したというわけではないのに、第

2軍は停止せざるをえなくなった。

「なんて無様な……」

砲数で勝りながら、一方的に魔道砲を撃ち込まれている現状に、アナスタシアは苛立ちを募らせる。

おまけに、集中砲火を浴びているわけでもないのに、軍全体が浮き足立っている。

こんなことでは、本当に数的優位を生かせないまま、敵にいいようにやられてしまうのではないか。

歯噛みするアナスタシアを尻目に、戦況は膠着しつつあった。

アナスタシアの見込みどおり、カイザーライヒ軍の砲撃は、それほど激しいものではなかった。

態勢を立て直した第2軍隷下の各師団の砲兵部隊も、本格的な砲撃を開始し、両軍ともに戦線を横に伸ばしている。

やがて、自軍側の砲撃が優勢になったのを見計らって、歩兵による突撃が敢行された。

しかし、この突撃は失敗に終わる。

いつの間にか、塹壕で簡易陣地を築き上げたカイザーライヒ第8軍は、重機関銃を巧みに配置して、数度にわたる第2軍の突撃を凌いだのである。

本来ならば、簡易塹壕など、重魔道砲で吹き飛ばすところであるが、第2軍の砲兵部隊の照準が甘いために、なかなか塹壕への直撃を加えることができないでいた。

結局、戦況はそのまま膠着し、遭遇戦初日は終わったのであった。
夜に、父ミハイルを通じて、司令部から戦況推移の詳細を知らされたアナスタシアは、嫌な予感しかしなかった。

本来、カイザーライヒ軍は、友軍に比して優勢な火砲を配備しているはずである。にもかかわらず、今回の遭遇戦では、敵の砲撃は散発的なものにすぎなかった。
とすれば、敵の主力は一体どこにいるのか。

カイザーライヒ軍の主力は対ガリア戦線に引き抜かれており、第8軍は張子の虎に過ぎない、という解釈もあり得る。
実際、司令部はそう判断して、正面攻勢を強めるつもりらしい。

だが、もし第8軍主力が健在で、この戦域のどこかに潜んでいるとしたら。
それは、致命的な結末を惹き起こすのではないか。

情報が乏しいため、正確なことはわからない。
しかし、アナスタシアは、そのような不安を抑えることができなかった。

翌朝、第2軍は、左翼側面からの激しい砲撃で叩き起こされることになる。

観測兵を用いた、間接照準射撃は精緻を極めた。

短時間のうちに、第2軍左翼の砲兵部隊が大損害を出し、部隊としての戦闘能力を喪失。

カイザーライヒ軍は、優勢な火砲支援のもと、左翼に総攻撃を開始し、そのために第2軍左翼は連鎖的に総崩れになる。

だが、真に恐るべきは、左翼瓦解ではなかった。

第2軍の正面攻勢は、敵の簡易塹壕で阻まれ、左翼側面が突破されつつある状況。

これは、言い換えれば、第2軍が半包囲下に置かれつつあることを意味していた。

レンネンカンプ率いる第1軍が、ケーニヒスベルク攻囲を中断して、救援に駆けつけてくれれば、第2軍は比較的軽度の損害のまま、後退可能であった。

しかし、ここで、両軍の司令官の不和が、致命的な役割を果たす。

第2軍司令部は、自軍の情況を正確に伝えなかった。

第1軍司令部も、極めて緩慢に救援に向けて南下した。湖沼地帯が障壁として立ちはだかったので、大きく迂回しながら。

これでは、救援に間に合うはずもない。

かくして、遭遇戦3日目。

第2軍にとって運命的な日が訪れることになる。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6012z/

【習作】赤い奔流――Ｇｅｒｏｉｎｉ ｎａｓｈｅｇｏ ｖｒｅｍｅｎｉ

2011年12月20日01時49分発行